

## 「新・山手樹一郎著作年譜」

### の製作にあたって

影山 亮

#### 山手樹一郎という作家

山手樹一郎という作家を一体どれだけの人々が知っているだろうか。テレビドラマの時代劇「桃太郎侍」の原作者だと説明すれば合点がいく人々も多少はいるだろうが、おそらく文学を研究している者でもその著作を読んだことがないのもちろん、名前すら聞いたことがないのが実情だろう。しかし、もしかしたら読書行為を娯楽として享受している一般読者の中で、特に時代小説を好んで読んでいる人々の中には、著作を読んだことや名前を聞いた人がいるかもしれない。

実際、山手は四〇〇以上の著作を発表し、多くの一般読者に愛読され、毎

日新聞社刊の『読書世論調査』内の「あなたの好む著者、執筆者は誰ですか」や「好きな著者とその作品」というランキングに、昭和二七（一九五二）年度から昭和四二（一九六七）年度にかけて自身とその著作が度々名を連ねている。昭和三四（一九五九）年度に至っては、全体の八位にその名前がランクインしている。また二〇一三年六月現在までに六一の著作が映画化され、昭和九（一九三四）年一月三一日から公開された「武道大鑑」（原作が「一年余日」、伊丹万作監督、日活）は、同年の日本映画部門の興業成績第四位にランクインしている。さらには四度の舞台化、一〇度のラジオドラマ化、

五度のテレビドラマ化など様々な媒体で一般読者の目(耳)に触れ、昭和五三(一九七八)年に逝去した後も様々な再録本が出版されている。昭和三五(一九六〇)年には講談社から全四〇巻、昭和五〇(一九七五)年に桃園書房から全一五巻、昭和五二(一九七七)年に春陽堂から全八四巻、昭和五五(一九八〇)年に再び春陽堂から全一二巻の全集も出版されている。また山手の純粹な著作とは言えないが、平成二〇(二〇〇八)年以降、漫画化もされている。

加えて、かつては貸本業界においても山手の人気は凄まじかった。金沢市内の貸本屋調査を行った、芳井先一の「貸本屋調査から―公共図書館と民衆を結ぶもの―」(『図書館雑誌』昭和三一「一九五六」年六月、日本図書館協会)内で「人気作家・読まれる本」という調査結果がある。ここで、

蔵書構成はその地域の利用者の要求によってさまる。勿論山手樹一郎の作品はどんなものでも、という共通したものもあって、中はおおむね限定される。(略)どの貸本屋でも一位山手樹一郎、二位中野実で、三位からは遊興街を除いて、江戸川乱

歩、富田常雄、横溝正史、吉川英治、源氏鶏太の順序となっている。(略)以下種類別にみた人気作家は次の通りである。(時代小説)山手樹一郎、吉川英治、角田喜久雄、野村胡堂、大林清、村上元三、陣出達郎、山岡荘八、大仏次郎、子母沢寛

というように、時代小説部門ではもちろん全部門でも一位に輝いている。また社会心理研究所の「大衆文学の読まれ方―貸本屋の調査から―」(『文学』昭和三二(一九五七)年一二月、岩波書店)の「好きな作家」の項目においても、夏目漱石、江戸川乱歩、山手樹一郎の順でランクインしている。これらの資料からも山手の人気ぶりがうかがえる。その人気は所得にもつながり、昭和三〇(一九五五)年には文学者の収入で、三位となっている。

このように一般読者の需要に応え、その娯楽に貢献し、人気を博した山手だが、現代では一般読者に一定の需要がありながら研究者や文壇には黙殺されるという、いわゆる大衆文学作家に多く見られる状況に見事にあてはまっている。その最たる象徴として著作年譜が挙げられる。

これまで山手の著作年譜は平成二五

(二〇一三)年現在、管見の限り一三本ある。しかし、その膨大な著作数にも起因して既存の著作年譜全てに誤りが多く、著作や初出年月が正確に網羅されている年譜は存在しない。これでは山手樹一郎研究が進むわけがない。文学研究は解釈だけでなく、研究対象の作品と他作家の著作との比較や、その時代におけるメディアとの結びつきなど、いわゆる同時代性が非常に重要となってくる。そのためには作品の初出年月や初出紙誌が明確でなければならぬし、もちろんそれには正確な著作年譜が必要不可欠である。

そこで今回立教大学大学院修士論文の一部として、「新・山手樹一郎著作年譜」を製作した。この年譜でも若干の初出年月、初出紙誌不明の著作は残ったものの、ほとんどの初出年月と初出、初取紙誌まで記載したほぼ完全で正確な著作年譜となった。さらに今回の調査では、単行本化されていない山手の著作や随筆も新たに数多く発見した。それらも「新・山手樹一郎著作年譜」に加えた。しかしこの年譜を製作するにあたって直面したのは、山手樹一郎関係の資料を発掘することの困難さであった。

#### 訂正の困難

新・山手樹一郎著作年譜を製作するにあたってまず確認したのは、既存の著作年譜である。山手自身が製作した「山手樹一郎略年譜」(『時代傑作小説』昭和三五「一九六〇」年九月、三世社)は、管見の限り最古の年譜である。その点では後の年譜に良い意味でも悪い意味でも多大な影響を及ぼしている。この年譜は昭和三四(一九五九)年までの記載であり、著作の初出紙誌も書いてあるが巻号の記載が無く、さらに誤りが非常に多く、抜けている著作もまた然りである。この年譜が後の年譜に悪い意味でも影響を及ぼしているというのはそういうことである。一方で最も参考になったのは八木昇の「山手樹一郎年譜」(『大衆文学大系 二七』昭和四八「一九七三」年七月、講談社)である。この年譜はこれまでのものに比べ格段に詳細なもので、昭和四七(一九七二)年まで書かれており、誤りや抜けている著作は相変わらずであるものの、多くの著作は初出月まで記載されており、またいくつか単行本の出版社の記載もある。初出月まで記載している年譜は、先にはもちろん、後にも八木氏のそれのみである。だが全著作に記載されているわけではない。さら

に誤りもあるため、今回製作した「新・山手樹一郎著作年譜」では全著作の初出月まで正確に記載した。しかし、八木氏の年譜が最も参考になったことに変わりはない。

である。今回国立国会図書館で実際に『岡山合同新聞』を調査したところ、『桃太郎侍』の初出年は、佐々木氏の訂正の通り昭和十四年一月二日から翌年の六月三〇日までであった。

山手の年譜においてはこのようなケースが非常に多い。八木氏の年譜によると、昭和二四（一九四九）年『講談倶楽部』（大日本雄弁会講談社）が初出となっている『豆腐屋剣法』だが、

総目次が出版されているが、昭和期はないので一冊ごとに見ていくしかない。『主婦の友』は月刊なので、一年一二冊ごとに見ていくのだ。月刊ならまだしも、『毎日グラフ』などの場合週刊だからさらに手間がかかる。

連載もののなかで判別不能である。初出年月が書いていないものが多いのだから当然と言えば当然である。実際に初出紙誌で確認して、初めて連載ものだと分かる著作もあった。単行本化されていない著作の連載ものがそうである。雑誌の連載ものならば、先述した日本近代文学館などでまとめて一年ごとに見てくるが、大変なのは新聞連載ものである。この場合は、国立国会図書館で新聞を一日ずつ確認するしかない。大抵の新聞連載ものは一年間の連載だと次第に判明したが、その日にちまで確認するにはやはり一日ずつの確認になる。また昭和三六（一九六一）年一月一日から『報知新聞』で連載された『侍の灯』は、連載終了が二年後の三月一〇日なので非常に大変であったが、結果として既存の年譜とは一線を画した、連載開始から終了まで記載した「新・山手樹一郎著作年譜」の完成に至った。

実際に調査を始めると、まず既存の年譜全てにおける初出年月の誤りの多さに直面する。おそらく山手の著作で最も著名な『桃太郎侍』の初出は、現在でも昭和十五年の『岡山合同新聞』とされている。参考にした八木氏の年譜でもそうである。そんな中、昭和三四（一九五九）年一月に出版された単行本、『少年の虹』（東都書房）の著者略歴で「昭和十四年、処女長編『桃太郎侍』の執筆を機として：（後略）」と書かれている。その後、佐々木浩が昭和五四（一九七九）年三月の『国文学 解釈と観賞』（至文堂）で山陽新聞社編集局資料部に問い合わせ、その書簡をもとに初出年は昭和十四年一月二日から翌年の六月三〇日までと訂正している。そして翌月に出版された『大衆文学通史・資料 大衆文学大系別巻』（講談社）でも担当者の磯貝勝太郎によって初出年が訂正されている。しかし、それ以降の年譜や再録本においては未だに『桃太郎侍』の初出年は昭和十五年となっているのが現状

である。実際には昭和二五（一九五〇）年が初出年である。同じく昭和三〇（一九五五）年『講談倶楽部』が初出となっている『青空剣法』も、実際には昭和二九（一九五四）年が初出年である。これらの場合は一年の誤差である。だからその年に著作が見当たらずに、その翌年や一年前を見ると見つかるのでもまだ楽である。これに対して八木氏の年譜では漏れているが、他の年譜で昭和三二（一九五七）年『主婦の友』（主婦の友社）が初出となっている『雪の駕籠』という著作がある。この著作を発見するのが大変だった。実際の初出年は、昭和二九（一九五四）年なのである。つまり翌年や一年前を見ても掲載されていないのだ。こういった場合は、手間はかかるが一年ごとに見ていくしかない。大正期の『主婦の友』は

こういった作業には貸出数が決まっている国立国会図書館ではなく、公益財団法人日本近代文学館などの施設が適している。この施設なら、一年ごとに雑誌を貸出閲覧が可能である。それだけでなくここはマイクロフィルムではなく、冊子本体のまま保存してあるので、実際に雑誌を手にとって閲覧可能である。その結果、昭和三七（一九六二）年『小説倶楽部』（桃園書房）一五巻五号に掲載された『季節のことは』といった、随筆類も新たに多く発見するに至った。今回の調査では大変お世話になった施設の一つである。以上のような、既存の年譜に記載されていた初出年を訂正するのは次第に当たり前の作業になり、一年誤っていても何とも思わなくなるほど多くあった。

連載ものの困難  
次に直面した困難は、連載ものの終了時を確認する作業だった。そもそも既存の著作年譜では読み切りなのか、連載ものなのか判別不能である。初出年月が書いていないものが多いのだから当然と言えば当然である。実際に初出紙誌で確認して、初めて連載ものだと分かる著作もあった。単行本化されていない著作の連載ものがそうである。雑誌の連載ものならば、先述した日本近代文学館などでまとめて一年ごとに見てくるが、大変なのは新聞連載ものである。この場合は、国立国会図書館で新聞を一日ずつ確認するしかない。大抵の新聞連載ものは一年間の連載だと次第に判明したが、その日にちまで確認するにはやはり一日ずつの確認になる。また昭和三六（一九六一）年一月一日から『報知新聞』で連載された『侍の灯』は、連載終了が二年後の三月一〇日なので非常に大変であったが、結果として既存の年譜とは一線を画した、連載開始から終了まで記載した「新・山手樹一郎著作年譜」の完成に至った。

新発見の喜び  
今回の調査では先述してきた困難だけでなく、新発見という喜びも非常に多くあった。例えば山手が編集長を務め、執筆もしていた博文館刊行の『少年譚海』という雑誌があった。この雑誌

に誤りもあるため、今回製作した「新・山手樹一郎著作年譜」では全著作の初出月まで正確に記載した。しかし、八木氏の年譜が最も参考になったことに変わりはない。

総目次が出版されているが、昭和期はないので一冊ごとに見ていくしかない。『主婦の友』は月刊なので、一年一二冊ごとに見ていくのだ。月刊ならまだしも、『毎日グラフ』などの場合週刊だからさらに手間がかかる。

連載ものの困難  
次に直面した困難は、連載ものの終了時を確認する作業だった。そもそも既存の著作年譜では読み切りなのか、

連載ものなのか判別不能である。初出年月が書いていないものが多いのだから当然と言えば当然である。実際に初出紙誌で確認して、初めて連載ものだと分かる著作もあった。単行本化されていない著作の連載ものがそうである。雑誌の連載ものならば、先述した日本近代文学館などでまとめて一年ごとに見てくるが、大変なのは新聞連載ものである。この場合は、国立国会図書館で新聞を一日ずつ確認するしかない。大抵の新聞連載ものは一年間の連載だと次第に判明したが、その日にちまで確認するにはやはり一日ずつの確認になる。また昭和三六（一九六一）年一月一日から『報知新聞』で連載された『侍の灯』は、連載終了が二年後の三月一〇日なので非常に大変であったが、結果として既存の年譜とは一線を画した、連載開始から終了まで記載した「新・山手樹一郎著作年譜」の完成に至った。

は現在では、所蔵している図書館が少ない。今回の調査では、東京都立多摩図書館、財団法人三康文化研究所附属三康図書館、財団法人大阪児童文学館に所蔵されていることが分かり、それら全てを閲覧した。山手が『少年譚海』にいくつか著作を発表しているのは、既存の年譜でも分かっていた。しかし実際に『少年譚海』を創刊号から現存する巻号まで確認すると、これまでの年譜にもなく、単行本化もされていない、もしくは年譜にはあるが単行本化されていない著作を新たに多く発見出来た。その中には、実は若殿でありながら、浪人に身をやつしている主人公桃太郎侍が、お侠な女と義賊の手下と共に、お家に乗っ取ろうと企む悪を倒し、百合姫と結ばれるという話の筋からも『桃太郎侍』の試作版と言える『飛燕一殺剣』（昭和一一（一九三六）年三月から五月に連載）といった重要な著作も含まれていた。この著作は、八木氏の年譜において初めて記載された。しかし単行本化されておらず、もちろん全集にも載っていない。『飛燕一殺剣』については山手自身が、武蔵野次郎との『対談』時代ユーモアの創始（『日本伝奇名作全集 八』昭和四五年「一九七〇」年五月、番町書房）内に

おいて「あれ（『桃太郎侍』・執筆者註）はね、ほかの題で二ぺん書いていることがあるんです」と発言している。言及はされていないが、発見がされていないという山手樹一郎研究における独特の状況が、一つ解消された。また小説類だけでなく、口絵に附した『幕末海軍の創生』（昭和一八「一九四三」年七月）といった著作の発見にも至った。その他にも博文館刊行の雑誌を現存する巻号全て閲覧した結果、既存の年譜には記載全くされていない著作を新たに多く発見するに至った。昭和三（一九二八）年九月に本名、井口長次（筆名は井口長二）の名で『少女世界』（博文館）に発表された『西瓜の爆弾』や、昭和四（一九二九）年一二月に口井蝶耳のペンネームで『朝日』（博文館）に発表された『松さんの禁酒』もそれらである。この点では三康図書館にご協力をいただき、大変お世話になった。加えてあらゆる出版社の大衆文学系の雑誌を出来る限り多く閲覧した結果、昭和三八（一九六三）年に『ゴールド絵本』シリーズ（講談社）の文章を担当した『安寿と厨子王』、昭和四三（一九六八）年八月に『サッポロ』（サッポロビール株式会社）に発表された随筆『タクシー嫌い』も新発見の一部で

ある。

また最大の新発見と言えるのは、山手の童話である。山手は本名で多くの童話を執筆した。先述の山手自ら制作した年譜にも、「大正六年（一九一七）一八歳 博文館発行の『幼年世界』に童話などを寄稿」と記載されている。しかし、この記述が後の年譜にそのまま引きされているだけで、実際には童話は発見されていなかった。今回、『幼年世界』（博文館）などの雑誌を調査して、それらを新たに数多く発見するに至った。その結果、山手樹一郎の最初の著作は大正六（一九一七）年『幼年世界』に発表した『鸚鵡の声』だということも新たに判明した。

今後の山手樹一郎研究

以上のような困難を手間暇かけて乗り越えて調査した結果、これまでの年譜とは一線を画した「新・山手樹一郎著作年譜」の完成に至った。多くの一般読者に受け入れられた山手だが、現在までの研究はほとんど成されていない。山手樹一郎研究の新たな一歩にこの年譜が貢献すれば願ってもないことである。今後は山手の著作自体と共に、新たに発見した山手の童話についても論じていきたいと考えている。なお「新・山手樹一郎著作年譜」は近刊の『立教大学大学院日本文学論叢』に発表を予定している。

影山 亮（立教大学大学院博士  
後期課程）